

題目:人は感受性の異なる他者の苦痛を共有することができるか?—痛みの社会性の実証的検討

氏名:佐々木 超悦

指導教官:亀田 達也

「痛みは個人的経験を越えた社会的性質を持つ」ということが、医療人類学、社会神経科学、社会・発達心理学を含む多様な領域において示唆されている。本研究の目的は、そのような「痛みの社会性」を実証的に検討することである。

「他者の痛みや不遇をどのように共有できるか」という問題は、社会科学の基礎にある根本的な問いである。たとえば、Adam Smith(1759)は『道徳感情論』の中で、他者の不遇や痛みを共有することで生じる“同情心”が社会的交換を支える上で中核的役割を担うと主張している。また、社会神経科学といった実証的な研究分野においても「痛みの共有」のメカニズムが明らかにされつつある(e.g. Singer, et al., 2004)。

日常場面でも、他者の苦痛を目撃することで自ら苦痛を感じる例は多い。たとえば、自分以外の誰かが注射の針を刺される場面を考えてみると良い。そのような場面を目撃した際に「痛そう」という不快感や「かわいそう」という同情的感情を生じる人は多いだろう。国際疼痛学会は、「痛み」について「現実もしくは潜在的な組織損傷に伴って起こる、あるいは組織損傷の言葉を使って述べられるような、不快な感覚的・情動的経験」と定義しており、この例では、「情動としての痛み」が共有されていたと言える。このような自他間での「情動の共有」に関しては、主に神経科学分野において、苦痛な状況下に置かれた他者(ターゲット)を観察している際の被験者の反応を測定することで、そのメカニズムが実証されてきた(e.g. Singer, et al., 2004)。

しかし、従来の研究は、被験者の反応が相手の状況に自分を一方向的に投影することで生じた自己完結的な反応だったのか、相手の感じている苦痛が双方向的に共有された社会的な反応だったのかについては明らかにしていない。たとえば、全盲者に非常に眩しい光が当てられる場面を観察するケースを考えてみよう。このような状況下では、人は、自身の光に対する感受性を相手に一方的に投影し苦痛情動を自ら引き受けてしまうのだろうか、あるいは、相手の感受性に応じて情動を認知的にコントロールすることができるのだろうか。従来の研究の多くが、実験の中でターゲットの「身体的な感受性」を明示しておらず、この点については未検証であった。

Kameda et al. (2012)は、この問いを検討するため、身体的な感受性が異なる他者(全盲者)をターゲットとする実験を行った。実験では、ターゲットとして晴眼者を観察する群(normal条件)と全盲者を観察する群(blind条件)が設けられ、非常に眩しい閃光と耳障りな高音がターゲットにそれぞれ与えられる映像が実験参加者に提示された。実験では、情動反応の指標として、参加者がターゲットの映像を観察している間の生理反応の変化(末梢血管の収縮)が測定された。実験の結果、normal条件では、光刺激を受ける場面でも音刺激を受ける場面でも同様に観察者の生理的喚起水準が高まったことが確認された。一方で、blind条件では、音刺激を受ける場面では生理的喚起が生じたのに対し、光刺激を受ける場面では生理的喚起は殆ど生じなかったことが確認された。つまり、平均的な参加者は、ターゲットの感受性に応じて自身の反応を抑制的に制御することで、相手の苦痛を双方向的に共有できることが示されたのである。

しかし、Kameda et al. (2012)が設定したターゲットは、「光に対して『自分が持つ感受性を持たない他者』」であり、『自分が持たない感受性を持つ他者』というタイプの他者がターゲットである場合については未検証であった。そこで本研究では、Kameda et al. (2012)の実験を踏襲し、

ターゲットとして「レーザーポインタの光を『熱い』と感じる皮膚感覚を持つ人物」を設定し実験を行った。

実験では、正常な皮膚感覚を持つ人物を観察する群(normal条件)と光を「熱い」と感じる皮膚感覚を持つ人物を観察する群(abnormal条件)が設けられ、熱した金属棒とレーザーポインタの光(正常な皮膚感覚を持つ者には無痛)が、ターゲットにそれぞれ与えられる映像が参加者に提示された。実験の結果、normal条件では、光刺激を受ける場面に比べ熱刺激を受ける場面の生理喚起水準が有意に高いことが確認された。一方で、abnormal条件では、両場面間の生理喚起水準に有意な差は認められなかった。つまり、平均的な参加者は、ターゲット感受性に応じて自身の情動反応を喚起させることで、相手の苦痛を双方向的に共有できることが示されたと言える。

本研究の結果は、Kameda et al. (2012)を発展させる形で「痛みは個人的経験を超えた社会的性質を持つ」という「痛みの社会性」を実証するものであった。また、他者の感受性の認知的理解が情動的な生理喚起の制御に影響したという結果は、“共感”が原初的プロセスと高次のプロセスの間の相互作用を持つ階層的現象である可能性を示唆するものであり(de waal, 2009)、“痛みの社会性”の基礎課程を理解する上で重要な意味を持つ。同時に、他者の不遇をどのように共有できるかという「社会的公正」の問題にも含意を持つだろう。